

維持透析患者に対する冠動脈 OCT 施行時の容量負荷についての検討

【背景・目的】透析患者は冠動脈疾患の有病率が高く、特に石灰化病変が高頻度である。また PCI 後の血管反応が強いことも特徴的である。OCT は IVUS に比して解像度が高く石灰化病変やステント内膜の描出に優れるため、透析症例の冠動脈評価に有用と考えられる。しかし造影剤や低分子デキストラン (LMWD) が必須であり心負荷が懸念される。今回我々は、その容量負荷をもたらす影響について検討した。【方法】2013 年 11 月から 2014 年 6 月に診断造影時に OCT を施行した透析症例 24 例を対象とした。冠動脈造影は定期透析前に施行、造影直前に ISDN を冠注した。使用した造影剤と LMWD 量を計測し、検査前後に測定した Swan-Ganz カテーテルによる諸指標の変化と比較した。【結果】使用薬剤量と Swan-Ganz カテーテルで得られた結果を表に示す。造影剤と LMWD の使用量は、PCWP・RAP との間に正相関 ($r=0.58$ [$p=0.003$], $r=0.74$ [$p<0.001$]) が認められた。検査中・後に心不全合併や透析を急いだ症例はなかった。【結論】透析症例においても OCT は安全に施行し得る。

表 使用薬剤量と Swan-Ganzカテーテルの測定値

	検査前	検査後	変化量	p値	total volume
造影剤+LMWD (ml)	-	-	-	-	223.3(±91.8)
ISDN (mg)	-	-	-	-	5.58(±2.43)
PCWP (mmHg)	15.0(±6.6)	19.5(±9.8)	4.5(±6.8)	0.0035	-
RAP (mmHg)	6.6(±3.7)	9.2(±5.2)	2.6(±3.2)	0.0007	-
CI (L/min/m ²)	3.39(±0.81)	3.63(±0.91)	0.24(±0.36)	0.0038	-